

熟慮した言葉

田 中 香 苗

私の頭の中に一つの絵が創作されて存在する。讃岐の片田舎、農村の夕まぐれ。あぜ道に大平さんが立っている。百姓の田んぼ仕事が終わるのを待っているのだ。のんびりした風景。この人と百姓との間には一切の距離はない。言葉は少ない。ポツリポツリ、間をおいての考え抜いた対話である。それが未知であっても既知であっても、心の通い合う対話なのである。以上は私の想像図のだが、いつか私には実在した大平像となっている。

大平さんは讃岐の純牛といわれた。落ちついていて、すべてに謙虚である。存在することに感謝があり、その存在の社会的政治的な自己責任を痛感する人だった。彼が巨大な存在になるまでには、郷党の先輩をはじめいたの友人知己の恩恵があった。政治世界に入って、特に深い関係があった故津島寿一氏、故池田勇人氏について、いろいろな形で、その恩義を語ったものである。とりわけ、池田総理との関係について、彼の言葉を、いま新鮮なものとして思い出す。「私は池田さんによって、自民党のいろいろな要職をやらせてもらった。政府の主要な仕事もさせてもらった。もはや何も求めるものはない。今後は前尾さんを扶けて宏池会を守って行くのみ」と。これは外務大臣を終え、自民党副幹事長のときであった。そして池田総理入院後の政治的に大変なときであった。私は彼に「池田さんの後継者は誰か」とサウンドしに行ったときのことだった。彼一流の、熟慮した言葉と消去法で、佐藤首相となるべきことを暗示したときだった。このときの池田から佐藤へのバトン・タッチは、みことな政治結果だった。これは大平氏の人柄、即ち誠実、沈着、良識判断を、静かな足どりによって完成したもので

あつた。このことのある後、田中角栄さんが「大平は偉い奴だ、大平だけができることであつた。彼一人でやつたことだ」。私に角栄さんが、このことをくりかえしいつたことも、今鮮やかに思い出す。

そのころ、私は大平さんや角栄さんとゴルフをすることがしばしばあつた。角栄さんは、またたくうちに、球歴のより長いわれわれを飛び越えて行く直前だつた。大平さんは角栄さんに追いつかれることに、いささかむきになつていて、なかなか口三味線も弾いた。短い言葉だつた。そして同時に、私にも「田中さん、あなたは未来性ですな」というのだ。私は未来有望の意味と受けとつてよろこんだが、しばらく考えてみると、これは「いつまでたつても駄目だな」ということの大平流の表現であることに気がついた。「外務大臣をやると表現に含蓄があるな」と笑つたこともある。また、私が毎日新聞をやめたときのことだ。スリーハンドレッドでの食事の折、大平さんはわざわざ私のテーブルにきて、「あなたはあきらめが早過ぎる」といわれた。この言葉に、彼の心中をしみじみと考えたことである。とにかく片言の中に一語に深い意味をもつた言葉を生み出していく人であつた。「あー、うー」は大平さんの専売特許だ。しかしその間に、考え抜いた言葉を創出する人であり、その場限りの言動をしない人だつた。テレビに出て、平然として、討論に負けることのできる人だつた。

大平さんは、常に静かで、考え込んで、時間をかけて判断する。そこで思い切つた実行に踏み出すのである。こうしたことが彼の公私の生活の中ににじみ出ていた。田中総理とともに北京に行く、当時はまだ問題が多かつた時期に、日中国交正常化をなしとげたものである。中国に行く直前、宏池会に大平さんを訪ねたとき、彼は日中の問題については、「法三章」で行くと切言したことも思い出される。やかましかつた閣僚の靖国神社参拝についても、総理のとき黙つて参拝をして、黙々国民の前に示すべきを示した。防衛問題についてその増強の予算化を確言した。むつかしい政治問題に、大平流の大胆率直な結論を示していた。

(元毎日新聞社社長)